

E. M. フォースターの『モーリス』における 「書かれた言葉」の重要性

安藤 洋平

『モーリス』批評の転換点

E. M. フォースター (E. M. Forster, 1879–1970) の小説『モーリス』(Maurice, 1971) は、1914年におおかた書き上げられ、その後幾度かの修正を経て彼の死後によく出版された。著名な作家が同性愛を真っ向から描いたということから、出版当初の批評家たちの反応は厳しいものも多かった。例えば、シンシア・オージック (Cynthia Ozick) は、『モーリス』を「おとぎ話」だとして「文学作品として失敗している」と酷評している (Ozick 64)。また、ジョージ・シュタイナー (George Steiner) は、その同性愛というテーマゆえに、フォースターの有名な格言である「国家を裏切るか友人を裏切るかと迫られたら、国家を裏切る勇気を持ちたい」や「ただ結びつけよ」⁽¹⁾の意味するところが同性愛に還元されてしまうことによって限定され狭められてしまうと指摘する (Steiner 481)。もっとも、シュタイナーの懸念は、それまで高く評価されてきたフォースターの作品群が同性愛的暗示を炙り出す再読に迫られることにより、その文学的価値を損なわれてしまうのではないかというホモフォビックなものだ。デイヴィッド・ロッジ (David Lodge) は、『モーリス』がフォースターの他の作品の価値を下げることはないにせよ、技巧に欠

けており、同性愛を直接的に描くという「誠実さよりも芸術的技術の方が重要」だと述べている (Lodge 473-474)。

そうした否定的意見の一方、ジェームズ・マレク (James Malek) は『モーリス』は単に「同性愛について」(強調は筆者、原文は引用符)の物語ではなく、「フォースターの全作品を特徴づける人間的価値 (human values)⁽²⁾」についての物語だと評価している。転換点として『モーリス』の批評に大きな変化をもたらしたのは、ロバート・マーティン (Robert Martin) による草分けの論文「エドワード・カーペンターと『モーリス』の二重構造」(“Edward Carpenter and the Double Structure of *Maurice*,” 1983) といえよう。この論文を契機に、エドワード・カーペンター (Edward Carpenter) の自然な肉体的欲望の賛美がその主題だとして、『モーリス』は積極的に評価されるようになっていったのである。⁽³⁾ 実際、『モーリス』の執筆は、フォースターが1960年にこの小説に付した「あとがき」(Terminal Note) の中で述べているように、彼がカーペンターとその恋人ジョージ・メリル (George Merrill) の住まいを訪れたことがきっかけだった。

「書かれた言葉」

マーティンは、この逸話やフォースターがカーペンターの思想を支持していたという事実から、『モーリス』における同性愛についての捉え方(思想)の「二重構造」を読解した。『モーリス』の粗筋をごく簡単に説明すると次のようである。主人公のモーリス・ホール (Maurice Hall) が、ケンブリッジ大学でのクライブ・ダラム (Clive Durham) との精神的なつながりを重んじて肉体的欲望を抑制するプラトニックな愛の失敗と挫折を経て、下層階級の猟番アレク・スカダー (Alec Scudder)

と肉体的欲望を充足させる関係を結ぶ。マーティンはその過程を、プラトンとジョン・アディントン・シモンズ (John Addington Symonds) の思想からカーペンターおよびウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) の思想への変遷だとして、この小説を二つの異なる思想の同性愛によって構成される物語だと論じたのだ。⁽⁴⁾

マーティンの論からもすでに明らかなように、『モーリス』は、プロットを展開させるもの、つまりは小説の構造を支えるもの、さらには、主人公モーリスを成長させるものとして哲学や思想が重要なものとなっている。クロード・サマーズ (Claude Summers) は、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) の『獄中記』 (*De Profundis*, 1905) のインターテクスチュアルな影響がこの小説の細部にまで見られると指摘し、その表象を辿って論じている (Summers 148)。プラトン哲学やカーペンターの思想だけでなく、聖書、新聞記事の宇宙進化論、チャイコフスキーの伝記まで、『モーリス』においてさまざまな書物や思想など、「書かれた言葉」が物語を進展させる重要な場面で言及されているということは見逃すべきではないだろう。書物のみならず、「書かれた言葉」としては登場人物間で交わされる手紙もまた重要なものである。

たしかに、「常に学者であって、書物に意識的 (awake to the printed word)」 (59, *Italic emphasis is mine*)⁽⁵⁾ なクライブが哲学、書物、知性 (/女性性) を象徴するのに対し、モーリスとアレクは自然、肉体的性、本能 (/男性性) を象徴することは語りの上で非常に明らかであり、それぞれの愛の形が対極のものを表象するという図式ができる。しかしながら、モーリスをプラトニズムから逃れさせ、物語をビルドゥングスロマン (成長物語) へと導くのは、紛れもなく「書かれた言葉」なのである。⁽⁶⁾

クライブと古典

モーリスもクライブも性についての知識を文学作品から習得した。モーリスはパブリックスクール準備学校の卒業を前にして、教員の一人であるデューシー氏 (Mr Ducie) から性についての「良い話 (good talk)」(6) を聞かされる。だがデューシーが教えた知識は、キリスト教教義に根ざす異性愛・家父長制社会における性のあり方であった。幼い頃から男性への性的指向を漠然と意識していたモーリスにとってその話は自身の体験を説明しうる「良い話」ではなかった。むしろ、師を「うそつき」(10) だと感じただけに終わったのだ。

思春期を迎えたパブリックスクール時代、モーリスは祖父が所持していた「検閲で [性的描写が] 削られてしまう前のマルティアリスの詩集」(17) から性の知識を得た。けれども彼にとってはクライブとの関係が結ばれるまでは自身のセクシュアリティについて確固とした認識がないままであったのだ。

他方のクライブにとっては書物、とりわけギリシャ古典がきわめて重要なものであった。

The boy[Clive] had always been a scholar, awake to the printed word, and the horrors the Bible evoked for him were to be laid by Plato. Never could he forget his emotion at first reading the *Phaedrus*. He saw there his malady described exquisitely, calmly, as a passion which we can direct, like any other, towards good or bad. ... Then he saw that the temperate pagan really did comprehend him, and, slipping past the Bible rather than opposing it, was offering a new guide for life. (59-60)

アダムとイヴとを人類の祖先とするキリスト教教義の異性愛主義を強

化する聖書は彼に「恐怖」を引き起こすだけであった。しかしながら、プラトンの『パイドロス』における男同士の絆の賛美は、聖書の恐怖を鎮めてくれる。そこには彼が「病癖」と思っていた同性愛的欲望が「情熱」として描かれていたのだった。「異教」としてのプラトンはクライブに聖書に反対するのではなく、むしろうまく^{かわ}駭すことを教えたのである。

生まれながらにしてクリスチャンであった彼は聖書やキリスト教教義の中にも救いを見出そうとした。デイヴィッドとジョナサンやイエス＝キリストと使徒たちとの関係も、クライブの救いとなりうるかのようではあった。だが、権威ある神聖な書物である「**経典 (the Scriptures)**」の中で提示されるキリスト教の解釈は、あくまでも異性愛を前提とする(60)。それらは**ホモソシヤル**なものではあっても**ホモセクシュアル**なものではなかったのだ⁽⁷⁾。結局、「魂のいかなる休息も聖書の中には見出すことはできなかった」ため、クライブは「古典」へと惹きつけられていったのである(60)。

生まれ育った環境から当初はなんのためらいもなく「非正統派は悪であると思っていた」(34) モーリスも、クライブに魅かれていくにつれ、次第に彼が挑戦的に提示するキリスト教(聖体拝領、三位一体、キリストの贖い)への疑念に対して論理的な論駁ができなくなっていく。そしてものの三週間の内にすべてのキリスト教関連の儀式から身を引いてしまうまでに至ったのである。

後にクライブは、神が十戒の中で同性愛を断罪しなかったことから、キリスト教における性の捉え方について「歴史を書きなおそうか」(80)と提案する。特定のイデオロギーを強化する伝統、慣習、常識、規範に「書き直し」によって新たな解釈(もしくは真実)を見出そうとするクライブの一方、モーリスはクライブの高度な知識についていけなかった。この話が持ち上がったのは、クライブがモーリスを好きになった理由を

彼の「美」＝外見/身体だと告白した時のことである。その後、クライブはモーリスが体現するようなミケランジェロの身体美への欲望への到達法として、「共通のもの」＝一般的美の賞賛と「私的なもの」＝身体への欲望ゆえの賞賛との二つがあると話したのだった (79)。これはクライブが知性を象徴し、モーリスが肉体性の象徴であることを如実に表す箇所である。

話を元に戻そう。コーンウォリス氏 (Mr Cornwallis) は翻訳の授業でプラトンの『饗宴』における性的描写の箇所を「ギリシャ人たちの口にするのも嫌な悪徳」(42) として訳出するのを止めさせ省略させた。ギリシャにおいて男性間の性交渉が年長者から年少者への教育の一形態としてあったことは今更改めて言及すべきでもないだろう。クライブはそれを「純粋な学問の一特徴」として弁護し、「それを省略してしまうのはアテネ社会の主要部を省略してしまうのと同じ」と熱弁する (42)。真実を追求すべきアカデミックな場において、ホモフォビックな偏見から真実を歪めて隠蔽することはクライブの学究精神にも反するものであったのだ。

クライブはモーリスに『饗宴』を読むよう促し、そうしてクライブはモーリスに『饗宴』に言及しながら愛を告げる。ところが「偏狭な因習的魂の底までショックを受けた」モーリスは無意識にクライブの同性に対する愛の言葉に対し、“Oh, rot!” “Don’t talk nonsense” “it’s the only subject absolutely beyond the limit” “it’s the worst crime in the calendar” (48) と続けざまに非難の言葉を投げかけてしまう。そして二人はしばらく距離を置くことになってしまうことになるのだった。

[B]looks meant so much for him[Clive] he forgot that they were a bewilderment to others. Had he trusted the body there would have been no disaster, but by linking their love to the past he linked it to the present, and

roused in his friend's mind the conventions and the fear of the law. (62)

クライブにとって精神的安息を与えてくれる「書物」の持つ意味は非常に大きかった。それゆえに彼は古典の中の「過去」の時代と「現在」の同性愛が犯罪である時代とでは、男同士の愛に対する社会的観念が異なるということを忘れてしまっていたのだ。古典の世界と現在とを混同してしまったクライブは、モーリスに「因習と掟への恐怖」を呼び起こしてしまった。この後、紆余曲折あり、二人は結ばれることになるのである。

このように、クライブにとっては自身の性認識と、モーリスとの関係を結ぶために、さらにはモーリスにセクシュアリティを自己認識させるために、古典が重要であった。モーリスにとっての救世主はもちろんキリストではなく、彼をキリスト教教義から解き放つ道を敷いたクライブ/プラトンだったのだ。権威的なテキストである古典は、つかの間とはいえ男同士の愛を達成させるのである。

古典からの脱却

しかしながら、あくまでも二人の「つながりはプラトンによって訓えられたもの」(69)、つまり「プラトニック」な関係だったのである。モーリスの欲望を喚起したのは、血肉を持つクライブという人なのであり、プラトンの著作ではなかった。モーリスは抑制できない肉体的欲望を充足させようとするものの、クライブはいつもそれを拒絶していた(85)。プラトニズムを信奉するクライブは「エクスタシーは持続しえない」が、ほかの「何か持続するもの」へと向かわせることで二人の関係を「永続的なもの」にできると考えていたのだ(85)。

やがてクライブが異性愛へと転向していくことで二人の絆は希薄になっていく。クライブが女性に魅かれるようになったのは彼が町へドライブに出かけた時のこと。女たちの「帽子、スカートを持ち上げる様子、香り、笑い声、ぬかるんだ道を渡るデリケートな足取り」といった「小さな詳細」が「混ざり合って魅力的な全体像を構成した」時のことがきっかけだった。しかしながら、この様子は女の断片を見ているにすぎず、極めて表層的な魅惑である。実際に彼が異性愛へと変わっていったのは、屋敷の主になるべきものとしての責任や母親からの重圧、そして因習的価値観によるものが大きい。大学を卒業後に地主として家屋敷を継ぐことになったクライブには結婚と子孫が期待されていた。モーリスとプラトニックな関係だけを望んだクライブは、つねにすでに性的な意味での「同性愛者」ではなかったのかもしれない。プラトンにおける男同士の絆は、単にクライブの哲学を支えるものであるというだけだったのである。

次第に一家の中で「権力の座を確保し」(88)、家族を指揮する「前途有望で偏狭な暴君」(88)になっていたモーリスは、「酒が好き」(98)で、「ファーつきのコートに身を包んでまるで巨大な動物のよう」(110)な見てくれからも明らかなように、男性性を誇示するようになっていた。他方、クライブは病に倒れた後に同性愛的関係を後悔して精神衰弱となり、「女性化」した男となる。二人のジェンダー表象の大きな違いからも、互いに相容れない者同士であることはすでに明らかだったのである。

クライブはモーリスから離れるため、一人でギリシャ旅行に出る。その頃、モーリスはギリシャに関心がなくなっていた。

Maurice had no use for Greece. His interest in the classics had been slight and obscene, and had vanished when he loved Clive. The stories of Harmodius and Aristogeiton, of Phaedrus, of the Theban Band were well

enough for those whose hearts were empty, but no substitute for life. That Clive should occasionally prefer them puzzled him. ... Maurice hated the very word[Greece], and by a curious inversion connected it with morbidity and death. Whenever he wanted to plan, to play tennis, to talk nonsense, Greece intervened. (96-97)

クライブにとっては自身の思想の根幹となっている古典も、モーリスにとっては単にクライブを愛するための手段でしかなかった。古典において言及されるさまざまな男同士の絆は、モーリスには「人生の代わり」になどならなかった。むしろ、彼は二人の関係を常に「妨げ[る]」ギリシャを嫌い、ギリシャを「病と死」に結びつけて考えていたのである。

クライブは、ギリシャ旅行の前にモーリスとの関係を断ち切ろうと、神話の「忘却の川 (Lethe)」や聖書の挿話を用いて、二人が男同士で愛し合ったがゆえに安らかに眠れない、地獄に落ちると話す (97)。結局のところクライブは哲学としてプラトンを信奉していても、根っからのクリスチャンであったのだ。

ところが、クライブが実際に見たギリシャは、彼の期待とは裏腹に荒涼としたものだった。それはモーリスが関連づけていた「病と死」を思わせる風景であり、その描写には、“barren plains” “dying light” “dead land” “one sterility touched another” (101) といった「不毛」や「死」を意味する形容辞が用いられる。あたかもこの景色が二人の関係の「死」を表すかのように、この景色を前にしてクライブは自分が「ノーマルになった」、すなわち、異性愛者になったのだとモーリスに電報を打つのである (101)。クライブの言葉の真意を理解できないモーリスはその説明を求めるためにすぐにイギリスへ帰ってくるよう手紙で促すものの、クライブはむしろ帰省を遅らせる。

そもそも二人は「書かれた言葉」では通じ合えないのである。大学時

代からすでに二人の間に交わされる「手紙は沈黙よりももっと速く〔真実を〕歪曲する」(71)のものであったのであり、破局した後も二人を隔てるものだったのである(119-120)。

結果的に二人の関係は終わりを迎え、絶望と苦悩の中モーリスは自殺を考えながら日々の生活を送り、新しい道へと進んで行くのである。クライブ/古典からの離別は、モーリスがプラトニックな愛を脱却し、この後アレクとの肉体的欲望を充足させる愛を築くための準備段階だったとでもいえよう。

新宇宙進化論

自殺を考えるモーリスに啓示的瞬間を与え、人生を生き抜く決心をさせたのが祖父グレイス氏(Mr Grace)の存在であり、そしてこの祖父が信じていた「新宇宙進化論(a new cosmogony)」(121)だった。祖父の宇宙進化論の解釈の根底にあるのはあくまでもキリスト教的思想を反映したものである。その要点は、神が太陽の中に存在しており、太陽の黒点は神の啓示であるというものだ(121)。この「新説」(122)はモーリスの人生にとって一つのターニング・ポイントとなる。

‘Maurice, you read the papers. You’ve seen the new theory—’ It was that a meteor swarm impinged on the rings of Saturn, and chipped pieces off them that fell into the sun. ... They were chipped off and reabsorbed into the good! Courteous and grave, the young man listened until a fear seized him that this tosh might be true. The fear was momentary, yet started *one of those rearrangements that affect the whole character*. It left him with the conviction that his grandfather was convinced. One more human being

had come alive. He had accomplished an act of creation, and as he did so
 Death turned her head away. (122, *Italic emphasis is mine*)

流星が土星の環にぶつかり、その破片が太陽へと吸収されていく。この新聞記事について聞かされたモーリスは、この現象が現実起こりうるかもしれないと恐怖を感じる。その恐怖はモーリスの「性格全体に影響を与えるような再調整の一つ」をもたらすのである。祖父の言葉「内なる力を、魂を、解き放て。しかしまだだ。夜が来るまでだめだ」(123)の「夜」とはアレクとの出逢いへの伏線であることはいうまでもない。繰り返される「内なる光」、そして「生きた心」からの助言である「親切にせよ」という言葉は、モーリスの心に留まり、「彼[モーリス]の内部で始まっていた再調整を続けた」のであった(123)。

デブラ・ラシク(Debrah Raschke)もモーリスにとってこの宇宙進化論が重要であったと論じている。ラシクは太陽の黒点をキリスト教教義というよりプラトンの理想としての「影」だと解釈し、元来、不吉な象徴である土星のリングの破片が生命の源としての太陽に吸収されることについて、闇と光、善と悪の混合だという。ラシクはそこに二項対立思考の脱構築の可能性を読み取っており、性的なものと精神的なもの、そしてヘテロセクシュアルとホモセクシュアルには厳密な定義がないのだと述べている(Raschke 161)。それは結果として、アレクのバイセクシュアリティやモーリスがアレクと結ぶことになる階級差を超える関係の予兆と考えられるのである。

モーリスにとってこの新宇宙進化論との出会いとは、これまでのキリスト教的思想や規範的価値観と彼自身の欲望との間、つまり、社会的制約の中で相反するものが妥協・折衷することの可能性が初めて示された啓示的瞬間といえる。だからこそ、この新説が彼の「性格全体」を「再調整」したのである。

チャイコフスキーの伝記

モーリスは、医学や催眠療法を頼って同性愛を「治療」しようとしていた頃のある日、チャイコフスキーのシンフォニーが演奏されるコンサートへ出かけることになる。そこでケンブリッジ時代の先輩であるリズリー (Risley) に再会し、チャイコフスキーが甥に恋をして『悲愴』(*The Pathetic Symphony*) をその甥に捧げたという話を聞かされる (141)。モーリスはすぐにチャイコフスキーの伝記を読む。

[T]he episode of the composer[Tchaikovsky]’s marriage conveys little to the normal reader, who vaguely assumes incompatibility, but it thrilled Maurice. He knew what the disaster meant ... Reading on, he made the acquaintance of ‘Bob’, the wonderful nephew to whom Tchaikovsky turns after the breakdown, and in whom is his spiritual and musical resurrection. The book blew off the gathering dust and he respected it as the one literary work that had ever helped him. But it only helped him backwards. (141–142)

『モーリス』においてチャイコフスキーへの言及はこの部分のほかにもう一ヶ所あり、それはモーリスがケンブリッジのリズリーの部屋でライブに初めて出逢ったその時である (28)。どちらもモーリスにとっての重要な転換点となっており、この小説におけるチャイコフスキーの重要性はブレット・キーリング (Bret Keeling) がすでに詳しく論じているため、本稿で詳しく追って論じる必要はないだろう。そのキーリングの指摘でとりわけ興味深いのは、チャイコフスキーの自伝を読む前までのモーリスは、自身の同性愛について「困難 (trouble)」という言葉で医師に説明していたものの、これ以降は「状況 (situation)」と呼ぶよ

うになるということだ。⁽⁸⁾チャイコフスキーの伝記はモーリスが「後退 (backward) するのを助けただけだった」と語られるが、キーリングの考察を踏まえれば、ここでの「後退」はこの語彙が本来持つ否定的な含蓄はないことは明らかである。簡潔に言えば、モーリスは「後退」することによって、再び自身の性指向に向き合うことができるようになっていくのである。

チャイコフスキーの伝記は「自分を助けてくれた唯一の文学作品としてこれに敬意を覚えた」というほど彼にとって重要なものとなった。「積もった塵を吹き飛ばし [て]」くれたこの伝記は、新宇宙進化論と同様にモーリスにターニング・ポイントとしての救いを与えたのである。

書記言語の規則を外れる手紙

この後、モーリスはクライブの屋敷ペンジ邸 (Penge) に猟番として仕えるアレクと出逢い、肉体関係を持つ。しかしながら、モーリスは階級意識や因習から現在の地位や家族を捨ててアレクとの関係を続けることに踏み切れず、ペンジ邸とアレクを避けるようになる。そこにアレクから電報と手紙が次々と届く。最初に届いた電報では、「戻ってきてください。今夜ボートハウスで待っています」(183) とだけ書かれていた。次に一通目の手紙が届く。その手紙が “I have [the] key” (184) という言葉を含んでいたことから、モーリスはこの手紙を「ゆすり」と考え、アレクとの肉体関係が暴露されてしまうのではないかという恐怖心から返事を書かない。

実を結ばない催眠療法からの帰り道、公園の外を王と女王が通り過ぎるため、モーリスは脱帽せねばならなかった。この時、彼は王室の者たちを「軽蔑した」(190)。「自分ではなくて、彼らが輪の柵の中にいるの

だ」(190)、つまり、規範的価値観の呪縛から逃れられずにいる人たちがの方がむしろ捕われた存在なのだと感じたのである。しかしながら、と同時に、階級意識にもひどく縛られたままでもあった—「俺は自分の階級に属していなくちゃならない、それは決まっていることなんだ」(191)。

このような葛藤を抱く中、アレクから新たな「ひどく長い (beastly long)」(192) 手紙が届く⁽⁹⁾。先の手紙と同様、文法的誤りも散見され、話し言葉をそのまま文字で表した手紙は、アレクの出身階級を如実に象徴する。デヤン・クズマノヴィッチ (Dejan Kuzmanovic) が指摘するように、この手紙にはアレクの心情が極めて混乱しているのを見て取ることができる。「脅し、嘆願、自己弁護、高慢、罪、ささいな話」(Kuzmanovic 207) といった様々な感情が入り乱れ、彼が実際に最も主張したいことは何なのかが曖昧である。クズマノヴィッチは、アレクもモーリスと同様に階級意識に捕われた人物だと指摘し、アレクはモーリスに階級意識から逃れる助けを求めているのだと考察している (Kuzmanovic 208–209)。また、石和田昌利も、この二通目の手紙を、モーリスと再び関係を持つための「策略の手段」だと指摘し、「現在の状況から救い出してもらうことを求める悲鳴」だと述べている (石和田 19)。そのような読みは妥当であろう。なぜなら小説中に実際言及されているようにアレクは「[階級] 社会に埋め込まれた一人の男」(209) であるからだ。

しかし、この手紙の重要性はモーリスとアレクとの関係を進展させるところにある。アレクの手紙の中での混乱状態はモーリスの混乱した心情をもまた表していると考えられる。

Why had he flung out these words, some foul, many stupid, some gracious? ... [I]t seemed *the sort of letter he might have written himself*. Muddle-headed? How about muddle-headed? If so, it was *his own line!* (193, *Italic emphasis is mine*)

モーリスが不可解に感じる様々な感情表現の入り乱れたアレクの手紙は、「自分自身が書いたかもしれないような手紙」だった。もしもアレクが「頭が混乱した状態」であるのなら、手紙の中の彼の混乱した言葉は、モーリス自身の言葉でありうるということを痛感する。この手紙を読んでようやくモーリスはアレクと再会する決意を固める。書記言語の規則を逸する手紙（に書かれた言葉）は、モーリスを規範から逸する道にしかと導いていく。この時、モーリスはアレクに自身の混乱状態を投影したわけだが、そうしたアレクへの自己投影が次のシーンでもキーとなる。

モーリスは再会の場所として大英博物館を指定した。アレクが同性愛の廉でモーリスをゆすろうとして緊迫感が流れる中、偶然パブリックスクール準備学校時代の恩師デューシーに再会する。デューシーはモーリスの「声」で彼に気づきはしたものの、名前を思い出すことができない。これはモーリスが知性よりも肉体性の象徴であることの例となる出来事である。この時、モーリスは「僕の名前はスカダーです」（199）とアレクの名を騙る。モーリスは「それ [「僕の名前はスカダーです」] を言葉にしたとき、[なぜそうしたのかという] 理由が分かっていた」（199）。彼は直感的かつ意識的に「スカダー」を名乗ったのである。似た者同士
の二人の感情が手紙＝書き言葉によって重なり合ったように、今度は発話行為によって二人が一つになるのである。

窮地を悟られないよう巧みにデューシーを躲したモーリスの勇氣に、アレクはゆすりを降参するのである。すでにモーリスもアレクも共に展示物には関心をなくしていた。まるで、二人が結ばれた今、学問追求が経済的に可能な上層中産階級や、知性（クライブ）を象徴するものとしての古典/ギリシャに関心をなくすかのよう。「この時から、二人は意識的に互いを愛するようになった」（202）。モーリスは地位を捨てて二人で英国内で生きて行こうと提案する。しかし今度はアレクの方が階級

差を超える関係の未来を悲観し、移住先のアルゼンチンでの将来を選ぶ。モーリスはアレクもまた自分と同じように階級意識や因習に捕われた人なのだと、「ある意味、二人は一人の人間なのだ」(207)と感じる。結末としては、モーリスはアレクからのボートハウスに来るようにと書かれた電報と入れ違いでサウサンプトンまで出発を見送りに行き、アレクが港に現れないことで彼の所在を察してボートハウスで結ばれることになる。「二人は階級の外で、親類も金もなしに生きて行かなくてはならない」けれども、「英国は二人に属している」(212)のだと語られるとき、そこには、文明国としてではなく、緑の国としての英国への憧憬と希望とが込められているのだ。

クライブに焦点化される結末の意味

二人が結ばれた章は、アレクの言葉「これでもう俺たちは離れ離れにならないだろう。もう終わったんだ」(213)で締めくくられる。フォースターが「あとがき」において「ハッピーエンディングが必須だった」(220)と述べているように、当然このシーンで小説は結末を迎えても良いはずである。しかしながらこの後もう一章が追加され、クライブが再び登場し、語りは彼に焦点化されることになる。フォースターはこの章について、「唯一の可能な結末だった」(223)としている。

クライブは選挙のための「嘆願書 (the printed appeal)」を作成しているところだったが、これに「満足していなかった」(214)。「書かれた言葉」の機能がモーリス/アレクにとって重要である一方、クライブが「書かれた言葉」に満足できない状態であることは印象的である。モーリスはクライブにアレクとの関係を告白しにやって来た。しかし、クライブの反応は、かつてモーリスがクライブの告白に対して発したものと同様、

「なんてグロテスクな知らせなんだ」(215) というホモフォビックなものであった。自身のことを「恐ろしいほどに哲学者」と明言するクライブにとり、「男同士のあらゆる関係にとって唯一の許しはそれが純粹にプラトニックであること」であって、下層階級の男と肉体関係を結んだモーリスはクライブにとって「怪物」のように思われた(216)。クライブはモーリスを説得して本来彼が居るべき場所へと引き戻そうとするものの、モーリスは耳を貸さない。なぜなら、モーリスは「アドバイスを受けに来たのでも、思想や観念について話しに来たのでもな[く]」(216)、ただ(別れを)告げに来ただけで、彼にとってクライブはすでに「過去に属している」(217) からだった。

クライブが話しをしている間にモーリスはすでに姿を消していた。彼はクライブの前からも、そして語り/テキストからも姿を消してしまうのである。そして語りの焦点化はクライブに移行したままで、語り手はクライブの人生の終わりまで見通し、俯瞰で伝えている。

To the end of his life Clive was not sure of the exact moment of [Maurice's] departure, and with the approach of old age he grew uncertain whether the moment had yet occurred. The Blue Room would glimmer, ferns undulate. Out of some eternal Cambridge his friend began beckoning to him, clothed in the sun, and shaking out the scents and sounds of May Term. (218)

「青い部屋」「シダ」「ケンブリッジ」とは、すべてモーリスとの関係を表すものである。晩年まで脳裏に焼きついた「手招きをする」モーリスの残像は、異性愛を選んでモーリスとの関係を断ち切ったことへのクライブの後悔を意味するのであろうか。

ジョン・フレッチャー (John Fletcher) は、モーリス/アレク (=カー

ペンター/メリル)の「男らしい愛(masculine love)」を構築・称揚するために、フォースター自身を表すような知的/「女性的」なクライブを排除するのだとして、『モーリス』を「フォースターの自己排除」の物語と読んでいる。フォースターの自己投影をクライブに見るフレッチャーの意見は示唆に富むものである。もしくは、真の欲望を抑圧して「偽装結婚」に落ち着かざるをえない同性愛者たちも多くいるということを経験によって同情的に示したとも考えられよう。またもしくは、プラトン主義の「哲学者」であるクライブのように、プラトニックな関係を超える男同士の愛は理解できない者もいるということを示したのであろうか。いずれにせよ、語りに戻ったクライブのモーリスへの愛は完全に断ち切られていないことを匂わせ、物語は結末となるのである。

興味深いことに、そして皮肉なことに、先に言及したクライブの「歴史を書きなおそうか」(80)という提案は実践されることはなかった。因習に固執する彼には、歴史に「書き直し」によって新たな意味を付与することができないのである。そもそも、歴史や「事実」というものが伝聞や個人の感情による誇張などを通して歪曲された結果としての「フィクション」であることはいままでもないが、クライブのように特定のイデオロギー下に生きる者には「事実」として受け入れられる歴史観を逸することができなかったということはきわめて象徴的である。

エクリチュールとしての「書かれた言葉」

モーリスの心情の変化やアレクとの関係にとって、いくつもの「書かれた言葉」が重要な役割を担っていることはこれまで見てきたとおりである。古典(ギリシャ)だけでなく、ペンジ邸に牧師が出入りしていることや、聖書の挿話を用いてモーリスと関係を断ち切ろうと説得したこ

と、彼が結婚によって異性愛制度へと入って行くことを考えれば、聖書もまたクライブを表すものと考えられるだろう。こうした学問的・宗教的・歴史的・文化的に権威ある「古い書かれた言葉」がクライブを象徴する一方、モーリスには、新理論としての宇宙進化論、当時の英国において紹介されたばかりの新しい作曲家であったチャイコフスキーの同性愛的な逸話を含む伝記という「新しい書かれた言葉」が重要なものとして機能していた。その最たるものが下層階級の者からの文法規則、書記言語の規範を逸する手紙である。科学理論、伝記、手紙を同一のレベルに並べて考えることは突飛に思われるかもしれない。しかしながら、どれもが実際の現象・人物を表すものであることに共通点があることは見逃すべきではないだろう。とりわけ手紙は私的な心情を露呈し前景化する情緒的な側面の強いものであるから、アレク（そしてモーリス）という「個人」をより如実に示すものである。対照的に古典や聖書は、実際のものの言語化というよりは、形而上のものを言語化したもの、いわゆる「フィクション」である。

モーリスに影響を与えた「新しい書かれた言葉」は、モーリスの人生にとって古典的テキストの特権的優位性を回避するものとして機能する。とりわけアレクの手紙はより一層、「エクリチュール」としての脱構築の様相を呈するものである。『モーリス』において、因習・規範・古い伝統といった権威を外れる「新しい書かれた言葉」をとおして、社会制度を外れる関係は築き上げられ、達成される。こうした意味で、「書かれた言葉」はこの小説の中で極めて重要なものといえるだろう。

そして何より、1914年には原形が書き上げられていた『モーリス』自体が1971年に出版された時にでさえ同性愛を真っ向から描いた「新しい小説」だったのである。フォースターは『モーリス』を書くという行為（エクリチュール）によって文学作品の（異性愛主義）伝統を打ち破ったのである。

フォースターにとっては、モーリスやアレクのような自分が実際に愛したハードボイルドな肉体派の男性性を自身が構築することは困難だった。しかし、インテリである彼は肉体で戦う者ではなく、「ペンで戦う者」だったのであり、規範的価値観に異議申し立てする作家である彼にとって、「言葉は武器」となる重要なものであったのだ (Stone 351)。フォースターは『モーリス』というテキストをとおして、「言葉」という「武器」によって特権的思想や古典に抗うことで、言語文化における階層秩序を切り崩そうとしたように思われる。

すべてを捨てた二人が森の中へと消えて行くエンディングは、ポール・ペッピス (Paul Peppis) がいうように「悲観的」なようにも思われ、フォースターの意図とは違って「あまりハッピー [エンディング] ではないようだ」とも指摘できる (Peppis 58-59)。また、ジョン・コーマー (John Colmer) がいうように、「勝利というより敗北というほうが説得力ある」(Colmer 126) のかもしれない。けれども、階級差を超える絆こそまさにフォースターが求めた「個人的関係」ともいえる (Colmer 126)。最終的にフォースターは、「階級の外で、親類も金もなしに生きて行 [く]」(212) ことを選んだモーリスとアレクとを「書かれた言葉」からなるテキスト (という言語によって構築される世界) 自体から逃れさせることで、彼らを語り/読みという権力からも自由にしたかったのであろうか。⁽¹³⁾

注

本稿は、日本英文学会中部支部第65回大会 (2013年10月5日、梶山学園大学) における研究発表の原稿に加筆・修正を施したものである。

- (1) 前者は、エッセー “What I Believe” (1939) において、“if I had to choose between betraying my country and betraying my friend, I hope I should have the guts to betray my country” (Forster, *Two Cheers for Democracy*, 68) と明言され

た言葉であり、後者は、第4作目の小説 *Howards End* (1910) のエピグラフ “Only connect …” で、ヒロイン Margaret Schlegel (小説のテーマとして) の異なる価値観の結びつけの試みを要約する言葉である。この “Only connect …” は Forster の文学的テーゼとして受け入れられていることは周知のことである。

- (2) “It was wrong to regard the novel as being exclusively or primarily ‘about’ homosexuality. Its principal concerns are spiritual life, liberation, psychological wholeness, the value of the individual, moral responsibility, the ennobling power of love, responsiveness to life’s variety and mystery—in short, most of the human values that *may help some* people attain these blessings or discover these values.” (James Malek’s unpublished essay, “Tackling Tribal Prejudices: Norms in Forster’s Homosexual Fiction,” 32 quoted in Claude Summers, 142, *Italic emphasis in original*)
- (3) Robert Martin と同じように 1983 年に、主人公 Maurice が Clive とのプラトニックな愛を経て、Edward Carpenter が模範としての Alec との階級差を超える肉体的欲望称揚の愛へ移行するという読解は、Claude Summers によっても論じられている。
- (4) Martin のこの単純な二重構造に対し、John Fletcher は、Symonds と Whitman は交流があり、思想的にも恩を受けていたと指摘している (Fletcher 66)。
- (5) 本稿における *Maurice* からの引用は、E. M. Forster, *Maurice* (Penguin, 2005) に拠り、以下引用箇所末尾に () で頁数のみを記す。
- (6) Howard Booth は、*Maurice* の関心は、「本能と言語」にあると述べている (Booth 185)。
- (7) Eve Sedgwick は、*Between Men: English Literature and Male Homosexual Desire* (1985) において、家父長制社会におけるホモソーシャルな男同士の絆には、無意識のホモセクシュアルな欲望とその切断があると指摘し、女性嫌悪/排除と同性愛嫌悪がそれを支えていると論じた。
- (8) 詳しくは Keeling, ““No Trace of Presence”: Tchaikovsky and the Sixth in Forster’s *Maurice*” を参照。なお、本稿では頁数のない電子版を参照したため、引用頁数は表記しない。
- (9) Alec からの「ひどく長い」手紙は次のようである。

Mr Hall, Mr Borenius has just spoke to me. Sir, you do not treat me fairly. I am sailing next week, per s.s.Normania. I wrote you I am going, it is not fair you never write to me. I come of a respectful family, I don’t think it fair to treat me

like a dog. My father is a respectable tradesman. I am going to be on my own in the Argentine. You say ‘Alec, you are a dear fellow’; but you do not write. *I know about you and Mr Durham*. Why do you say ‘call me Maurice’, and then treat me so unfairly? Mr Hall, I am coming to London Tuesday. If you do not want me at your home say where in London, you had better see me—I would make you sorry for it. Sir, nothing of note has occurred since you left Penge. Cricket seems over, some of the great trees as lost some of their leaves, which is very early. Has Mr Borenius spoken to you about certain girls? I can’t help being rather rough, it is some men’s nature, but you should not treat me like a dog. It was before you came. It is natural to want a girl, you cannot go against human nature. Mr Borenius found out about the girls through the new communion class. He has just spoken to me. I have never come like that to a gentleman before. Were you annoyed at being disturbed so early? Sir, it was your fault, your head was on me. I had my work, I was Mr Durham’s servant, not yours. I am not your servant, I will not be treated as your servant, and I don’t care if the world knows it. I will show respect *where it’s due only*, that is to say to gentleman who are gentleman. Simcox says, ‘Mr Hall says to put him in about eighth.’ I put you in fifth, but I was captain, and you have no right to treat me unfairly on that account. ... P.S. *I know something*. (192, Italic emphasis and all spelling and grammatical errors in original)

- (10) Jeff Bush は、Forster が *Maurice* に付した “Terminal Note” においては、“Forster’s passion for the greenwood” (Bush 1) が明白であるゆえ、“Forster presents the greenwood not only as a lost paradise but as a place where people, particularly homosexual people, could lose themselves in anonymity” (Bush 2) と述べ、“[t]he outside is a place where people can embrace anonymity and escape identification, a place where true subjectivity, and sexuality, can be experienced” (Bush 6) と論じている。
- (11) John Fletcher は、“Forster’s self-erasure” を *Maurice* 読解の主題としながら、“the gradual but systematic exclusion of the Forsterian intellectual from the novel’s final vision of masculine love” (Fletcher 65) として伝記的逸話を含めた考察を行っている。
- (12) Joshua Adair は、先の Martin の論が Clive を軽視していることを指摘する。“Durham negates his desire, silencing himself, but preserving his position within society” (Adair 55) として、当時の同性愛者たちが「社会的地位、影響、特権、もちろん、自由を保持するため」に結婚生活に入っていかにざるをえ

なかった (Adair 59) という。それゆえ、“the idyllic escape at the novel’s end excludes Clive … because the self-denial and thwarted desire of his narrative most effectively mirrors the realities of homosexuality in early twentieth-century English society” (Adair 53) と、Clive こそが *Maurice* において、当時の文化的状況における最も一般的な同性愛者であると述べている。

- (13) Clive に語りの焦点化がなされたまま小説が終わりとなるのは興味深い。Forster は、Clive が因習や規範を重んじたゆえに、彼を生涯、語り/「書かれた言葉」という言語規範の世界に縛ったままとしたのだろうか。

引用文献

- Adair, Joshua G. “A Love That Cares Not Speak Its Name: Clive Durham as Narrative Guide in E. M. Forster’s *Maurice*.” *Skase Journal of Literary Studies* 2.1 (2010): 51–66.
- Booth, Howard J. “*Maurice*.” *The Cambridge Companion to E. M. Forster*. Ed. David Bradshaw. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 173–87.
- Bush, Jeff. “‘I’d rather be dirty’: The Queering of the Greenwood in E. M. Forster’s *Maurice*.” *Dandelion: Postgraduate Arts Journal & Research Network* 4.1 (Spring 2013): 1–13.
- Fletcher, John. “Forster’s Self-erasure: *Maurice* and the Scene of Masculine Love.” *Sexual Sameness: Textual Differences in Lesbian and Gay Writing*. Ed. Joseph Bristow. London: Routledge, 1992. 64–90.
- Forster, E. M. *Maurice*. London: Penguin, 2005.
- Keeling, Bret. L. ““No Trace of Presence”: Tchaikovsky and the Sixth in Forster’s *Maurice*.” *Mosaic* 26.1 (March 2003): 85–101.
- Kuzmanovic, Dejan. “Seduction Rhetoric, Masculinity, and Homoeroticism in Wilde, Gide, Stoker, and Forster.” PhD dissertation. Rice University. 2003.
- Lodge, David. “Before the Deluge.” *E. M. Forster: The Critical Heritage*. Ed. Philip Gardner. London: Routledge, 1973. 473–74.
- Martin, Robert K. “Edward Carpenter and the Double Structure of *Maurice*.” *E. M. Forster: Contemporary Critical Essays*. Ed. Jeremy Tambling. Basingstoke: Macmillan, 1995. 100–14.
- Ozick, Cynthia. *Art and Ardor*. New York: Knopf, 1983.
- Peppis, Paul. “Forster and England.” *The Cambridge Companion to E. M. Forster*.

- Ed. David Bradshaw. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 47–61.
- Raschke, Debrah. “Breaking the Engagement with Philosophy: Re-envisioning Hetero/Homo Relations in *Maurice*.” *Queer Forster*. Eds. Robert K. Martin and George Piggford. Chicago: The U of Chicago P, 1997. 151–65.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosexual Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Steiner, George. “Under the Greenwood Tree.” *E. M. Forster: The Critical Heritage*. Ed. Philip Gardner. London: Routledge, 1973. 475–82.
- Stone, Wilfred. “E. M. Forster’s Subversive Individualism.” *Howards End*. By E. M. Forster. Ed. Paul B. Armstrong. New York: Norton, 1998. 340–52.
- Summers, Claude J. *E. M. Forster*. New York: Frederick Ungar, 1983.
- 石和田昌利 「E・M・フォースターの小説の中の手紙」『白山英米文学』東洋大学英米文学科37 (2012) : 1–21.
- プラトン『饗宴』久保勉訳、岩波文庫、1982.